

# 和漢脩身書

河村與二郎編輯

卷二

71  
259

會  
函  
架  
號

大日本圖書會館			
一	四	一	一
冊	號	架	函

一

K110.1  
39  
2

版 權 免 許

田中芳男閱正

河村與一郎編輯  
櫻戸玉緒校字

# 和漢脩身書

明治十五年  
十月刊行

文求堂藏版

## 和漢脩身書卷二

田中芳男閱正

河村與一郎編輯  
櫻戸玉緒校字

### 第一章

○君無群古季。羣下乃心を

歸せよ所を理。臣を堅き

志を勵了了。自ら堅固に

其意あり。

白虎通

孝經

明太祖諭

論語

家道訓

孝經傳其書卷二

○父も事ふ所に資了。以て  
君も事多其敬同し。  
○君も愛ふ所も過る  
を以て。必し諫す。諫切なるに留  
るもの多。忠又非也。  
○下流に居る。上を以て  
君を惡む。

○上を以て  
君を惡む。國政は諂  
ふ。是れ大に  
留る不忠不敬  
能く至る。慎  
む。是れ諂  
ふ。是れ  
留る不忠不敬



和漢書卷二

童子習

も雷同多し。口を法之ん言ふへ可し。後。  
○罔家の法。綱阿り紀あり。謹言之日。遵以行ふ。亦孝能理といふ也。

第二章

○人禮正きは安之。禮をけ

礼記

詩經

孫多危し。

○鼠亦相食。及體阿あり。人とし。字禮多し。らんや。人とし。了禮を即。胡を適ふ。死をた

童子習

○祖を最尊とす。次者則伯叔。又次ふし。兄皆吾尊属

たり。

全

○父行に姑。吾行に姉。伯母。叔母外祖舅氏。凡此尊長。理宜之。宗室。樊祀所敬。皆盡。禮を盡す。父母と同一之。きよ。

全

○長者問ふと。おらは。徐ふ

思ふ。言答へよ。對ふ。言ふ。實言を以て。誰と勿き。雜ふ。は。な。り。れ。

全

○長者賜ふ。阿ふ。禮。敢て。辭さ。長者命ふ。敢あらは。敢て。敬詞を請へ。

礼記

○年長を。以て。倍ふ。則父

少事一十年以長不事則  
之に兄と一事ふ。

○父召きは諾を不ふ先  
生召せば諾す不ふ唯  
起つ。

第三章

○年方不童蒙。血氣未定

童子習

中ら以。宜し之教戒を知字。  
以之德性以養ふ厚し。

○高丘不登不勿走。高木に  
上は勿能。一方に墜る墜る  
は。肢體養ひ以失ふ不。

○深淵を窺ふ勿能。汲井を  
視ふ不る。一方に墜る溺

全

全

全

全

れを。永く其身を失ふ事ふ  
 ○穢言人を罵る事。人必其  
 汝を罵らん。強を恃み人を  
 凌るは。人亦汝を凌らん。  
 ○人の物を竊む勿き。終身  
 賊名に留る。人の物を奪ふ事  
 可き。必は鬪争致らん。

全

全

○借與を私去る勿き。博奕  
 を好む事。無用を辨は  
 ず。勿き。非急を察する勿き。  
 ○惡犬を防ぎ。不され  
 ば。則人亦噬む。牛馬に近は  
 ず。勿き。或は恐らく。他人を  
 踉ん。

全

○生蟲也。殺之勿死。新卉也。折之勿生。此數端亦戒一也。此冬。兒童能傑也。

大學

○天子与り以字。庶人亦至。此也。壹是之皆。脩身也。以本と及。

忠經

○忠と冬其心也。一に及也。

皆川  
淇園  
説

叙名

貝原  
篤信  
訓

謂也

○物は愛を以て勉強を以て之を仁と謂ふ。

○義は宜なり。事物は裁制を以て各ふ宜しきを得る。

礼とは人倫に作法を察す。



子孫卿

說淇皆川

語夢宋葉

心ヲ謹シ美阿里。身に則あり。  
 深を礼と以物。  
 ○是を是とし。非を非と以。  
 之を智といふ。  
 ○言の違を以。之を信と謂ふ。  
 ○陰徳を有。及を以。人を

說苑

訓篤貝原

活きたり。大を以。及を以。  
 ○陰徳を以。里を以。必其榮  
 けうけり。以。其子孫。及  
 ふ。  
 ○天道を還。以。好むとい  
 たり。善を行ふ。は天を以。  
 幸を降。惡を行ふ。は天

より禍をくたしをす。

第四章

○君子を先擇之て。而後交  
をす。故に尤其之をす。小人  
を先中しけりて。而後擇む。  
故に怨多し。

○交淺し言深き者も妄

子文中

三善  
清行  
言

子文中

貝原  
篤信  
訓

より

○君子は接るる水乃如く。  
小人は満しけりて醜のこ

○人と約を去きは必其信  
を固く守る所。一を以約  
を違へは人ふあ言後と思

全

ふる。

○人の我ふ不義無礼を  
 を怒り恨むへり。それ  
 他人に過す能は。我心ふあ  
 けり。是小人の常情な  
 きは責はふべし。

○凡かれり物を返さば買

全

宗思坐銘  
長叔右

へりもの。價を償はさば  
 其財主は怨おし。けり。不  
 人。人の怨怒積りて乃天禍  
 畏る。

○善を見ても。已り出  
 り。如く悪を見ても。已り病  
 りてせよ。

從政  
名言

○至誠以之。  
人を感せし  
む。猶服さし  
る者あり。况  
や。詐を設け  
ず。以て之を  
行ふ也。



文中  
子

貝原  
篤信  
訓

### 第五章

○勢を以て交する者。勢  
かた弱し。則て絶て。利を以  
て交はざるもの。利窮せ  
ば。則て散る。  
○言を必信にす。一。り  
る。免の小事にも。偽る

口鏡修身書卷二  
十一

徳川家語

穀梁傳

幣のら波。其事を小なりを  
表。心致害を深咎を大を理。  
○人其貴賤に与らば信義  
能二ふとわ字。身を立りな  
らひなり。

○言能以て言たる所能者  
其信なり。言能信者与らば

礼記

何を以て言信をせん。信能以  
て信せらば所能者。道なり。  
信ふと字。道有らば。何を  
以て信をせん。

○君子其能を以て所を毛  
つと。人其病を免。人のよ  
くせらば所を以て。人其愧

子孫卿

訓篤貝原

一〇〇

○人ふ贈はふ言を以て其  
流を珠玉と有り重し人を傷  
たふふ言は以て其流を銀  
戟と有り甚し。

第六章

○書は讀むは我身に受用

録慎思

全

を法と專一ふ志と有り  
○學者は須く志を立ふを  
以て本と次幣し其志は  
所の者無何そや道を知ふ  
を常法と志と有り

○學問の要二あり其未  
知と其所を知り其是とふ

知得所守。行處不在了。能  
及。

抱朴子

○藥能治病。治心能知。心  
と母。學能修身。治身能及。

唐陽城訓

○學者無以。忠と孝。故為  
學。學之所及。

元吳氏語

○敏不敏。無天事。學不學  
も人あり。天無火。能心細。可  
及。人無勉。無。

古語

○勤心。是は貪ふ。勝。慎  
心。は禍に勝。

唐韓退之說

○業。無勤。心。に精。之。嬉  
心。は。其。行。を。思。ふ。不。成。

口業修身書卷三

産語

言。隨ふにやぬる。  
○丈夫能耻る。游食より大  
あはれなき。男子能事る。生  
治む以より。先をわたり

貝原  
篤信  
訓

○第七章  
儉約とと驕と費を記也。

周礼

驕能は何ぞや。わが分外を  
行ふより。費とは何ぞや。  
無用能財を用ふ能記いふ。  
○室を高くうらと絶と母。和  
暖を能は便とす。飲食能珍  
羞あらはせと急。一を能飽  
能便とす。



宋蘇東坡說

大隆內義語

明王陽明說

無名氏說

○分を安んじ。富を以て福を  
 養ふ。比。胃腹寛之。以て富  
 氣を之。以て富。費財省財。以  
 以て財を富。以て富。  
 ○世界に珍器を。國家に碎  
 之。斧を以て。珍味を命を責は  
 大敵あり。

○養生を。清心寡欲を要と  
 以て。  
 ○無事ふ。富家に貧。以て  
 貧。更に富家に富。以て富  
 勝あり。無事に。以て。茅屋に  
 住む。事を。有る。玉堂に座を  
 以て。富に。富に。富に。

孟子

第八章

○人以言耻。恥者。羞也。人耻者。言其羞也。耻者。羞也。言其羞也。耻者。羞也。言其羞也。

○小人能過也。必文也。

○過者。改也。改者。過也。過者。改也。改者。過也。過者。改也。改者。過也。

全

論語

宋邵康節語

國語

○口に愧者。恥也。身に愧者。恥也。心に愧者。恥也。心に愧者。恥也。

○禮を為す者。終る者。恥也。

○中兒。小勝者。不為恥也。里。華ふ。實也。施は。恥也。

恥をぬ。施しを濟生と爲す。

和漢脩身書卷二 終

版權免許

明治十五年十月七日  
同年同月刻成發兌

定價七錢

編輯者 京都府平民 河村與一郎

上京區第五組西三防橋川町五百十九番地

出版人 京都府平民 田中治兵衛

下京區第五組寺町條北交野町七番戸

發兌人 大阪府平民 柳原喜兵衛

大阪東區北久太郎町四丁目十五番地

# 和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷三

71  
259

大日本教育會館藏			
一	四	一	一
冊	號	架	函

函一  
架一  
號

東  
丁  
一

K110,1  
39  
3